

隠さず、逃げず、ごまかさないことが事故対応の基本

清水 陽一

◆医療従事者と被害者の気持ちの違いを知る◆

私と医療事故との関わりは、大学時代に遡ります。在学中に起こった医療事故をめぐる、「研修医という経験の浅い医師が一人当直をして事故を招いたこと」「連絡体制が悪くて救命できなかったこと」は都会の大学病院として許しがたいと、ご遺族とともに告発したのです。しかし30数年も前で、弁護士に介入してもらうことさえ知らなかったこともあり、結果的に負けてしまいました。

その後医師になってからは、医療裁判で患者側に依頼されて裁判所に意見書を書いてきました。そんな中、今度は私の父が医療事故で亡くなったのです。父はALS（筋萎縮性側索硬化症）で3年間寝たきりだったのですが、病院内で人工呼吸器がはずれ死亡しました。この時、一番ショックを受けたのはその時の悲しみは別として、医師としての私が「呼吸器がはずれたことに気が付かなかったミス」を、看護師さんが正直に話してくれてよかった」と少し救われた気持ちだったのに対し、母が「病院に殺された」と言ったことに対する、医師である私と母の感性の違いでした。このことは私にとって、医療者と患者側の気持ちを理解する上で非常に大きな転機となりました。私は、そういうことも含めずと医療事故に関わってきたのです。

◆自分の医療に信念があれば、うそをつく必要がない◆

私は新葛飾病院に来てからも、それ以前のいろいろな病院でも、その間に起こった院内の事故やトラブルに関しては全面的に私が解決してきました。裁判になったことは皆無です。基本的に隠さずごまかす逃げなければ、患者さん側ともめることはそんなにないのです。訴えの99%は医療側の対応が悪いため患者さん側の怒りあり、医療被害者の多くは真相の究明と心からの謝罪を望んでいるのです。

訴訟が多発して医師が萎縮するという意見がありますが、これは見当違いと言っていいでしょう。要するに萎縮しているのではなく、自分の医療に信念がないからなのです。自分の医療に自信を持っていれば、間違えた時には間違いましたと謝罪できるわけです。ごまかしたりうそをついたり、逃げたりすることはないのです。

確かに事故を認めるのは怖いですし嫌です。事故はないにこしたことはありません。でも私たち医療者は、事故で患者さんの生命を奪うこともあるわけですから、それだけの覚悟をしなくてははいけないのです。過失の問題、システムの問題、個人の問題など、事故にはいろいろなケースがあると思いますが、自分の診療に自信があればうろたえる必要はないですし、誠心誠意をもって対応することで患者側との信頼関係が構築できると考えています。

◆望まれるドイツ型の医師職業裁判所◆

最近、医療事故の原因究明を第三者機関にゆだねようという動きがあります。これに対して、いくつかの医療機関が反対しているのには驚きます。医療の代表者、患者さん、他の有識者で構成される第三者機関が「これはひどすぎる」というものを捜査機関にゆだねるといふことの、どこに反対する理由があるのかと思います。

逆に自信を持って行なっている医療であれば、捜査機関に回されるはずがありません。

ただ私は、基本的には医療事故の処罰は刑事罰ではなくて、ドイツの医師職業裁判所のようなものによるのが良いと思っています。日本の医療事故では原告（遺族）と弁護士、裁判官のどれもが医療の素人であるのに対し、被告は専門家である病院とそれに協力する大学教授ですから、原告側に非常に不利な戦いとなります。ドイツの医師職業裁判所は、医師と法律の専門家によって構成されるもので、医師は名誉職で給料がありません。患者さん

の告発を受けて検事として告発するのは医師で、告発されるのも医師ということになり、医療の専門家同士で事故原因を究明することになります。(詳しくは岡嶋道夫東京医科歯科大学名誉教授のHP <http://www.hi-ho.ne.jp/okajimamic/> を参照してください。)〈追記：岡嶋教授も6月3日、癌で亡くなられましたが、サイトは永久保存されています〉

◆倫理観のない医師には医師免許を交付しないこと◆

私は、病院というのは安全とともに倫理が一番大事だと考えています。倫理観のない医師に対しては医師免許を剥奪し、二度と医師免許を交付しないようにすべきだと思っています。

倫理観のない人たち、たとえば医学部の学生が複数で強姦したというような事件がありました。しかしその人たちは頭が良いので、刑期を終えてまた医学部を受験し合格しています。今の制度ではそれが許されてしまいます。不正請求をした医師もそうです。不正請求は刑事事件で、詐欺です。患者がいないのに、患者が受診したようにみせかけてお金を請求するわけですから。しかしそういう人たちも、今の制度では教育を課してそれを終わればすぐに復帰できるようになっています。

私は、どんなに頭が良くても倫理観のない人間には、絶対に医師になって欲しくないと思います。そのためには、倫理観のない人に二度と医師免許を取らせないようにする、先に述べたような特別の裁判所を作る必要があると主張しているのです。医師にとって医師免許を剥奪され、二度と復帰できないのは死刑に等しいことです。私は死刑廃止論者ですが、これは必要だと思っています。

医師は心が優しくて真面目なこと。私はこれが一番大事だと思います。真面目であれば、患者さんを良くしようと思って勉強します。臨床医にはそんなに頭が良くなくても、倫理的で真面目な人、患者のために一生懸命勉強し続ける人、そういう人になってもらいたいと思っています。また、それを社会的にやらせるような仕組みが必要だと思えますね。

◆大切な主治医と患者のコミュニケーション◆

2004年10月、私どもでは別の病院の医療事故でお子さんを亡くされた豊田さんという方を、医療安全対策室の担当者として迎えました。患者や家族の気持ちがよくわかり、院内の透明性を高める上で有効だと考えたからです。また、問題があればすぐ内部告発をしなさいと、いわば内部告発奨励さえしています。

現在は、豊田さんを迎えた頃と比べると院内のシステムがたいへん良く働くようになってきました。豊田さん自身の方向性も変わり、アメリカで見られるような、医療被害や医療事故に遭われたりした方の傍にいてお話を聞いてあげる、支えてあげるというような存在になってきています。

私自身もそういう意味ではずいぶん暇になりました。昔はなにかあれば全部私が解決したのですが、今はかなりの部分は現場で解決できるようになりました。それだけ院内の現場の人たちが変わってきたのです。

たとえば、ラジオ波を受けて翌日亡くなった方がいました。その時も「今から家族に全部お話して警察に届けます」と現場から私に電話があり、現場で対応してもらいました。それで、主治医が患者さんのご家族に話をし「警察に届けます」と言いますと、家族からは「届けなくてけっこうです」と言われたそうです。しかし、法的な問題がありますから警察に届けて司法解剖をしました。

その結果、内胸動脈に高周波の影響と思われる動脈瘤ができて、それが自然に破裂したのが原因だということがわかりました。そんなことが起こり得ることさえ私たちの誰も知らなかった非常にまれなケースで、司法解剖をしなければわからなかったことであり、学会にも発表しました。

ただ、そのことを主治医がご霊前に報告に行った折、ご家族の方は、警察に届けて主治医がいやな目に会わなかったか心配してくれたそうです。現場の主治医と患者さんのご家族がきちんとコミュニケーションがとれてい

たから、そういう対応をしてもきちんと理解していただけたわけです。大事なのは現場のスタッフの対応なのです。事故は起こらないのが一番ですが、万が一起こった時にどういう対応ができているかだと思います。

◆「うそをつかない病院」を現場に徹底 ◆

私は入職してきた医師に最初に、「この病院では最初から全部開示します。ですから恥ずかしくない診療録を書きなさい」などと言いますが、私どもの病院は患者さんから要求があればすぐにカルテなど全てをお見せします。もし事故が起こった場合は、それ相応の損害賠償をするということもはっきり表明しています。

隠すことが一番良くないのです。それに加えて、憶測を語らないということも大事です。まだはっきりしないことを言って、それがまた違っていたというような場合は患者さんのご家族も疲労してしまいます。私は基本的に、わからないことはわからないと言いなさいと言っています。わかったようなふりをしてはいけません。それが大事だと思います。

病気を治療している時もそうです。もし診療していてわからない場合には、他のところで診てもらったり、紹介状を書いたりして他の先生に診てもらうことが必要です。抱え込まないということが私は大事だと思っています。私たちは一方向からしか診ることができませんが、他の先生は別の方向から診てくれるかもしれません。そういうことが大事なのではないでしょうか。



(ナーシングプラザ .com 今月のコラム第 64 回 2008/8 より)

【清水陽一さん 略歴】

1949 年 生まれ

1975 年 東京医科大学卒業……卒業後すぐに関東通信病院内科レジデント（3年間）

この間、狭山事件の真相をたどす会、三里塚での医療活動に君枝夫人と共に参加
退職直前の3か月間は、電電公社の海底ケーブルを行う航海船の船医に

1979 年 関東通信病院内科研修医

1980 年 榊原記念病院 循環器内科入職……日本テレビの「愛は地球を救う」の企画で、エチオピアで医療活動
翌年にはフィリピンのスモークマウンテンを訪問

1986 年 医療法人財団石心会 狭山病院 循環器科部長、透析室室長

1987 年 東京医科大学客員講師

1993 年 医療法人社団三記東鳳 新東京病院 循環器科部長

1999 年 医療法人社団明芳会 新葛飾病院院長

NPO 法人「患者のための医療ネット」副代表、「医療の良心を守る市民の会」副代表

「架け橋～患者・家族との信頼関係をつなぐ対話研究会」副代表

NPO 法人生活企画ジェフリー理事

2011 年 6 月 19 日 永眠

【役職】

日本心臓学会特別正会員（FJCC）

日本冠疾患学会評議員 日本心臓血管内視鏡学会評議員

日本心血管カテーテル治療学会評議員・指導医

日本心血管インターベンション学会指導医

日本循環器学会専門医／日本内科学会認定医／日本医師会認定産業医

葛飾警察署犯罪被害者支援ネットワーク幹事会会員

清水陽一さん追悼文集

※限られたスペースに掲載するため、順不同をお許しください。

清水さんからもらった干物と言葉

「渡したいものがあるから、病院に来てよ」

清水さんからそう言われたのは、たしか昨年夏ごろだった。大腸がん再発の兆候があることは知っていたので、携帯電話を切った僕は「いったい何を託されるのだろうか」と、すこし心が重くなった。後日、緊張気味に院長室を訪ねると、清水さんはこやかに迎え入れてくれた。

「ほら、これ」と渡されたのは、院長室の冷蔵庫でカチカチに凍っていた魚の干物だった。

「ひ、干物ですか??」

「もう僕は長くないからね。院長室を整理してたら、出てきたのよ。君、金にならん仕事してるだろ。たまには家族においしいもの食べさせてあげてよ」

干物と一緒に、カタログギフトの商品券も渡された。なにか重要な書類でも託されるのではないかとドキドキしていた僕は、肩すかしをくらわれた気分だった。でも、目をかけてくれていることは、うれしかった。それに、干物は上等なもので、脂がのって大変おいしかった。

宴席などで会うたびに、清水さんは僕をからかいの対象にした。抗がん剤のために体力を落とし、マスクをしている清水さんに「感染に気をつけないといけませんね」と言うと、

「そうだね。君は社会のばい菌みたいなもんだからねえ」

と僕のことを嗤った。でもそれは、親しみを込めた嗤いだった。医療事故被害者を攻撃する「医療崩壊派」の医師たちを批判するような、「金にならん仕事」をしていた僕のことを、清水さんは「おもしろいやつだ」ぐらいには、評価してくれていたのだと思う。

たしかに、医療記事で生計を立てているライターの立場で、医師に盾突くような仕事をするのは、損することのほうが多いかもしれない。医師に情報（利益）を供与されないと記事が書けない医療ライターたちは、どうしても医師の立場に近くなる性向をもっている。患者側よりも、医師側のほうに、顔を向けがちになるのだ。

「マスコミは患者寄り過ぎる」と批判する医師もいるが、記事を書いている僕の実感からいうと、むしろ患者側に立ち続けることのほうが、ずっとむずかしい。少しでも歯向かおうものなら、手厳しい反撃を食らうこともある。なんせ相手は日本有数のエリート集団だ。彼らを批判するには、それなりの覚悟と胆力が必要だ。「寄らば大樹の陰」でいるほうが、ライターとしてはよっぽど楽なのだ。

清水さんも、そのような医療ジャーナリズムの実情に、気づいていたのではないだろうか。昨年11月、患者、医療者、マスコミ関係者などが集まる会合で、清水さんが講演した。医学生時代から医師社会の権威的な体質と闘ってきた清水さんに、「我々ジャーナリズムに携わる人間に、言いたいことはないですか?」と僕は質問した。すると清水さんは、こう答えた。

「たじろぐな、と言いたいね」

ほんとうに、そのとおりだ。ここ5、6年、「医療崩壊」を主張する一部の医師たちの反撃に、日本の医療ジャーナリズムはどれだけ振り回されてきただろう。確固たる軸を持っていないために、あわて、ふためき、たじろいだ。

清水さんは今年2月の集まりで、こうも言っていた。

「患者さんのことを思いやれる優しい医療者が、日本にはまだたくさんいる。医療崩壊なんかしていない」

清水さんこそ、患者さんを思いやれる、優しい医療者の筆頭だった。そして、清水さんは強かった。権威にも、がんにもたじろぐことなく、信念を貫き通した。

それに比べて僕は、打たれ弱い人間だとつくづく思う。正直言って、しょっちゅうたじろぎそうになる。

でも、この仕事を続けるかぎり、簡単に折れてしまうわけにはいかない。

「たじろがない」強い気持ちで、仕事に向かうことができているだろうか。清水さんの言葉が干物の小骨のように、弱い僕の心に突き刺さり続けている。

ジャーナリスト 鳥集 徹

❁強さ+優しさ+正義感=清水陽一先生

私は小学生の頃、仮面ライダーが大好きでした。

強くて、優しくて、正義感のかたまりのような、最強のヒーローでした。

今、清水先生のことを思い出すと、先生は大人の世界の仮面ライダーだったんだと思います。

患者さんとは柔らかい笑顔で接し、その一方で、組織や権力には毅然と向き合いました。

常に弱い人の立場に立ち、リスクを恐れず正義を実行する先生の姿勢は、私たちにいくつかの番組を作る情熱を与えてくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。

去年の年末、単身赴任中の名古屋で、清水先生の闘病の様子をテレビで拝見してメールを送った私に、先生が返信してくれた文章が残っていました。先生に許可を得なければならないところですが、きっと許してくださると思います、紹介させていただきます。清水先生の優しさと強さがあふれる、素敵なメールです。

内多 勝康さま

ご無沙汰しております。メールありがとうございます。

現在癌で苦しんでいるより抗がん剤の副作用で苦しんでおります。

リンパへの転移のため治療が抗がん剤しかないため受け入れざるを得ません。といっても元気に一步一步歩んでおります。

友を呼ぶのか最近患者さんも末期の癌患者さんが増えております。

私がこのような状況のため患者さんも私に親近感を持ち、意思疎通ができ医療者としては癌に感謝です。

外来に通っている患者さんもみな心配してくれ、「お大事に」と先に言われています。そういう意味では幸せ者です。

生きていうちに戻ってきてください。お会いできることを楽しみにしております。

ますますのご活躍を祈念いたします。

清水陽一

私が仮面ライダーのことをいつまでも覚えているように、数多くの人たちが、清水先生の人柄や情熱を忘れることはないでしょう。

先生の人なつこい笑顔は、記憶力が怪しくなってきた私の脳の中にも、しっかりと根付いています。

亡くなる前に、もう一度お会いできなかったことが、本当に残念です。

清水先生、心から、ありがとうございました。そして、ご苦労様でした。

NHK 名古屋放送局アナウンサー 内多勝康

❁清水先生が錦糸町の講演会で、「曲がり角を曲がると幸せになる」という赤毛のアンから言葉を引かれながら、ご自身ががんであることを話されました。”自分は、がんになって初めて患者さんの気持ちがわかった気がする、幸せなんです”と。私は人生の大転機を迎えていて、曲がり角を曲がると怖い犬が吠えたり、水溜りがあるもんだと不安でした。清水先生のお話を伺って、人生の曲がり角を曲がる勇気が出ました。本物の勇気の人のみが勇気を呼び起こす、と教えて頂きました。心より、感謝を込めまして。

池田朝子

❁昨年、国際医療福祉大学大学院の『現場に学ぶ 医療福祉倫理』でご講義いただき、その後はゆきさんのゼミにも参加なさり、とても熱心に、つたないわたしたちの討論に耳を傾けていらっしゃる姿が忘れられません。「こんなに優しい場所はないよ」とおっしゃって「ここから逃げたらおわりだよ」とも付け加えられたのが心に刺さりました。

「逃げない」それは、日常のささいなことの積み重ね。そういうことを教えてくださいました。ありがとうございました。

国際医療福祉大学大学院 神保康子

🌸 清水先生と初めてお会いしたのは、初めて新葛飾病院を訪ねたときでした。事故の当事者である私に、清水先生は、「僕も十字架を背負い続けている」と、ご自分が研修医時代に出会った事故の経験をお話してくださいました。その経験を決して忘れずに胸の中に置きながら、前を向いて医療に携わり、公平な態度で医療事故に向き合い続けてこられたその姿勢にとても感銘を受けたのを覚えています。新葛飾病院で毎月行っていたADR研修会のなかで、「謝罪」というテーマについて意見交換したことがありました。そのとき、清水先生は、「当事者がたとえ泣き崩れていても、謝罪させたい。身体を抱え込みながらも。そうしないと、謝罪するタイミングはどんどん失われていく。当事者からその機会を奪ってはいけない」という思いを語ってくださいました。こんな院長先生が支えてくださっていたら、医療者は自分の芯をもって患者家族と向き合えるのではないかと胸が熱くなりました。

『架け橋』の設立から3年。副代表として私たちを支えてくださいましたね。厳しい社会情勢の中でも、清水先生がいてくださることで、私たちは自分たちの信念を大切に、粛々と活動を続けていく決心ができたのだと思います。今でも、元気に、颯爽とお部屋に入られて、辛口けどあたたかい冗談をふりまいてお姿が目焼き付いていて、清水先生がこの世にいらっしやらないことが信じられません。清水先生、本当にありがとうございました。これから、清水先生の「嘘をつかない医療」というご意志を大切に頑張っていきます。どうぞこれからも私たちを見守っててください。

自治医科大学 高山詩穂

🌸 「うそをつき、次第にそれをうそとも思わなくなって、本当だと信じ込む」医療など、特殊で閉鎖的な職場では、よくあることだと思っていました。

うそをつかない医療 などできるのだろうか。

それが、清水陽一さんと徹底的に、議論したかったテーマ。

これからは、清水さんの書き残された物などを拝見しながら、自問自答で、その答えを捜していきたいと思います。

いつか、あの世で「うそをつかない医療・文化はできるのか」を議論いたしましょう。また会う日まで。ではでは、、、

奈良県医療政策部部長 武末文男

🌸 清水陽一さんの笑顔をいつも思い起こし、

「うそをつかない医療」「医療に安全文化を」

「医療版事故調査機関の早期設立」を実現するまで訴え続けます。

医療の良心を守る市民の会 代表 国際医療福祉大学大学院 永井裕之

🌸 清水陽一先生を失ったことが、多くの人々にとってどれ程大きな衝撃であったか……。先生の足跡を知るにつけ、改めて62歳と言うお若い死が残念でなりません。

「嘘をつかない医療」の哲学をもって、多くの実践を重ねてこられたお姿が、「医者はずまず患者の訴えを信じるものだ。そして決して嘘をつかないものだ」と、91歳で死を迎える1週間前まで町医者として地域医療に情熱をもってあたっていた父の姿と重なります。

清水先生ご自身、まだまだたくさんの患者さんたちを支え、もっともっと医療に携わっていたかった事でしょう。どんなにか、この早すぎる死が悔しく無念であった事か……。ご心中は察するに余りあります。

しかし、先生の業績は、後に続く多くの医療関係者の方たちに確実に受け継がれてゆくでしょう。お姿はなくても、先生の精神は確かに存在し未来に繋がって行くのです。

清水陽一先生、どうぞお心安らかに眠りください。

NPO法人生活企画ジェフリー理事 齋藤三枝子

🌸 「神様がお選びになられたのですね。

生前ガンと闘い、天国に召された方々の為に……

天国では、生前一番輝いていたお姿でお過ごしになるとのこと。きっと、白衣に身を包み、いつもの少しはにかんだ笑顔で、「ああ楽しい、すごいでしょ」とおっしゃっていることでしょう。心よりご冥福をお祈りいたします。

社会人学生 長谷川 恭子

🌸義侠心と知的関心領域の広さと

清水さんといつ知り合ったか、いまとなつては記憶が定かでないのだが、多分私が堀切中央病院の院長になった平成8年（1996）ころのことではなかったかと思う。葛飾区医師会での活動や、隣合う病院どうしのお付き合いを通して、すぐ意気投合したが、実は、彼と私の間にはいろいろ共通点があることに、お互いすぐ気づいた。まず彼も、1984-85年にアフリカのエチオピアを襲った、大干ばつ飢餓災害の時、民間団体の派遣でかの国に赴き、医療救援活動に従事している。私は私で、シェアの方の派遣で同時期に行っていた。

私のように、卒後研修もそこそこに、青年海外協力隊に応募して、チュニジアに行ってしまうといった、医者として、やくざな一匹オオカミ的コースを歩んでしまった人間と違い、卓抜な循環器内科専門医として、大きな業績を残してきた彼の若い日に、エチオピアの山間僻地をロバの背に揺られて村の往診に出かけるようなところもあったということが、それ自体面白いというか、脱帽せざるを得ない。また、共通の友人に、国際協力 NGO センター（JANIC）理事長で、恵泉女学園大学教授の大橋正明さんがいたりして、学生運動や医学部での彼の武勇譚なども教えられていた。奥さまと清水さんはそういう意味でも盟友であつたらしい。

1990年代から2000年代を通して、彼は新葛飾病院の院長として激務にいそしみながら、市民運動の中でのご自分の役割を少しもゆるがせにせず、医療安全の確立に尽力し、患者さん・医療事故被害者の立場に立って、医療訴訟においても、果敢で、公正なたたかいを続けてきた。その志操の高さには、敬服のほかはない。私自身は、貧乏な NGO を率いつつ、山谷でのホームレス医療などにも従事していたが、ときどき、清水さんが寄付を持って訪れてきてくださったり、行き倒れの救急患者さんを新葛飾病院に快く引き受けてくださったり、また、私自身のつたない講演会に熱心に参加してくださったり、その義侠心と知的な関心領域の広さに感嘆せざるを得なかった。

彼を失って、心から嘆き悲しむ人は多いに違いないが、私もその一人として、とても彼の器には及ばないとしても、生前にいただいた、ご厚誼と友情にささやかにでも報いるような働きをしていきたいと思うこと切である。天上の清水さんに、深く、ありがとうと言いたい。

NPO 法人・シェア＝国際保健協力市民の会、浅草病院医師 本田 徹

🌸最後まで患者の生と思いを支える

いい医療のために、患者の安全のために、患者と仲間とともにいるために、命の最後の一滴まで振り絞るように生きられた先生の生きる姿勢に深く感銘を受けました。清水先生のご講義、ご講演は何度もお聴きしました。そこにはいつも患者とともにいる、医療者としての正義を貫く先生のお姿がありました。なかでも、私がとても感動したのは、私がお聴きした先生の最後のご講義のあるエピソードでした。

それは新葛飾病院に入院したある末期がん患者のエピソードです。74歳のその患者は、末期の膵臓がんで清水先生の病院に入院してきました。症状が進んだ彼は、両目にもやがかかったように視界が悪くなり、色が見えなくなりました。そのとき、その患者は、「色が見たい、もう一度美しい景色が見たい」と清水先生に訴えました。清水先生は、その患者の願いをかなえてあげたいと思い、余命わずかなその患者のために白内障の手術をお願いする紹介状を眼科に送りました。その患者は、本当なら手術など考えられない状態でしたが、無事片目だけ白内障の手術をすることができました。亡くなるほんの少し前のことでした。そして眼鏡店で新しい眼鏡を作ってもらい、家族と近くの公園にでかけました。そこで、彼はだれよりも早くシラサギを見つけ、美しい景色と愛しい家族の顔をはっきりと目に焼き付け、1週間後、家族に見守られて旅立っていきました。

清水先生はおっしゃいました。年齢も旅立ちの日が迫っていることも関係ない、患者が生きたいように生きるのをできる限り支える、願いがかなうように努力する、それが医療、医師の仕事だと。ともすれば、高齢者に対しては「高齢だからそのくらいもう仕方ないよ」「もう死期が近いのだから、手術なんて…」という対応をしがちな医療の中にあつて、清水先生は、この患者の生を最後まで投げ出さずに支えたのでした。患者は満足し、家族はそのようなかけがえのない時間がもてたことに、心から感謝しました。最後まであきらめない、それは清水先生の生き方そのものだったのでないでしょうか。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

医療福祉ジャーナリスト 早野 ZITO 真佐子

🌸同僚医師には厳しく、自分には一層、厳しく

2002年に当社で創刊した「患者のための医療」の編集委員であった。「嘘をつかない医療」の実践者で、病院の待合室には「患者のための医療」を常に置いてくださっていた。創刊当時、「なかなか部数が伸びなくて苦戦しています」とぼくが愚痴をこぼすと、清水さんは「この雑誌が読まれるようなら、医療はもっと良くなっていたよ」とシニカルに、しかし暖かい笑みを浮かべながら、ぼくを宥めてくれた。

「患者のための医療」は、2000年ごろから急速に増えた医療事故裁判を背景に、2002年に創刊された。「医療はだれのものか？」という問いかけが基本にあった。編集委員には、医療裁判を患者側の立場で戦う弁護士、医療の世界では異端者ともいえる医療事故裁判で患者側に立って証言をしたり鑑定書を書いたりする医師、さらには社会学者などになっていた。医学書専門出版社としては、大胆で、挑戦的な雑誌だった。事実、ある大学病院の書店からは、「うちの病院の悪口が出ているような雑誌は置けない」と云われた。雑誌にはその大学病院の院長が、医療事故再発を防ぐために何をすべきかの論文が掲載されているにもかかわらず……。たった9年前のことだ。

清水さんの「患者のための医療」の実践は徹底していた。嘘をつかず、患者を人格として認める医療であった。嘘をつかない、と言えば当たり前のように聞こえるが、実践するとなると、説明するために時間がいくらあっても足りない。「先生はいつ家に帰るのですか」と聞いたことがある。「できるだけ週末には帰るようにしているんだけどね」と笑ってごまかした。きっと、週末も帰ることができなかったのだろう、とぼくは確信した。

新葛飾病院は決して大きな病院ではない。126床の中規模病院だ。しかし診療内容は、きらりと光っている。心臓内科医として、日本で初の心臓カテーテル治療をしたのが院長の清水さんだ。そのため、循環器内科、循環器外科では、手術件数、最先端医療の実践でも、常に日本のトップレベルであった。清水さんは、「優秀な医師は、優秀な医師を呼ぶんだ。心臓外科でしっかりとした実績を収めていれば、循環器の優秀な専門医が全国から集まってくる」と誇らしげに言っていた。そして、「患者さんから信頼されない医師には、医療はできない」と同僚医師には厳しく、さらに自分には、一層厳しく、自分のすべてを、患者にそして医療にささげていた。

「患者のための医療」は、2007年に13号を出した時点で休刊した。今では、すべての医療関係者が「患者のための医療」「患者中心の医療」を口にする。しかし、かつては、「患者のための医療」は、清水さんのようなほんの一部の医師しか、口にできなかったことを思うと、まだ、道半ばだが、医療改革は前進した、とぼくは感じている。それにしても、清水陽一さんの死は、辛い。代え難い人を亡くしてしまった。

株式会社篠原出版新社 井澤 泰

🌸2010年9月、清水先生の講義パワポの最後のページにはドキッとさせられました。笑顔で天に昇る天使を背景に「ああ、おもしろかった」と大きな白抜きの文字！「その日」の思いがくっきりと語られていたのです。同世代の闘士、またひとり天への出発（たびだち）を急いでいるのかと思うと、口惜しくてなりませんでした。

清水先生の＜強きを挫き、弱きを扶く＞姿は、本当に正義感の塊りでした。＜隠さない・逃げない・ごまかさない＞というスローガンは、医療領域だけではなく、わたしにとって生きることそのもののミッションとなっています。ゆきさんという砦があるよと教えてくださった清水先生、これからも天の声を聞かせてください。

国際医療福祉大学大学院 高田順江

🌸いつも胸を張り前を向いて進んでいた清水先生、やさしい笑顔が印象的で、みんなの人気者！

少しでも先生のような人間に近づけるよう、私もしっかり前を向き、胸を張って、いつも笑顔で歩んでいきます。今まで本当に有り難うございました。

医療事故市民オンブズマン・メディオ 副議長 すがまた接骨院 院長 菅俣 弘道

🌸「事は簡単、同業者として悪いことは正すという単純なこと」

清水先生を存じ上げていただのはそれほど長い年月ではありません。短い間に、いくつかのとても印象的な会話をさせていただいたことが、私の大切な支えとなっています。

2008年秋の医療の質・安全学会で、地域で医療安全につながる取り組みをしている機関として表彰されたのが新葛飾病院の患者支援室で、清水院長が表彰を受けにいらっしゃいました。私が20分ほどの話をし、表彰される清水先生を紹介させていただいたのが最初の出会いでした。挨拶を交わした後は静かに離れたところに座っておられた先生を「そろそろ順番ですから壇上にいきましょうか」と肩を軽くたたいて誘いに行きました。それを見ていた人が、表彰後「岡本さん、清水先生のことよくご存知なのですか？」と聞きにきました。「いいえ、今日が初めてです。なぜですか？」と問い返したところ、「いえ、さっき先生の肩を軽くたたいていらしたけど、清水先生にそういうことできる人は少ないです」と言われたのです。「あら、偉い先生に大変なことしちゃったのかな」という気持ちと、「あの先生はそんなこと気にしてないと思うけどな」という思いが同時に湧きました。

その後1年ほどして、豊田郁子さんとお目にかかることになり、彼女を通して清水先生と再会しました。先生は、にこやかに笑いながら、「いや～お久しぶり。良く覚えていますよ。僕たちの取り組みをアメリカではとっくの昔にやっていたんですね。再会するのは縁があるんだね」とおっしゃってくださいました。な～んだ、ぜんぜん怖くないじゃない！その時の先生の笑顔を思い出すと、この先生を「怖い人」と思っている方がおかしいのではないかと思いました。

それからは何度も打ち合わせなどでお目にかかりましたが、特に個別にお話しすることもありませんでした。お目にかかるたびに清水先生の純粋な少年のような笑顔が私の中に残って行きました。とても穏やかで芯がぶれない。人間として、医師として一番大事なところを間違わなければ、ユーモアたっぷりの楽しい先生でした。昨年秋の研修会の後に、食事をしながらお話をしていた時、清水先生と「事故や怪しい行為を隠したい、隠してやろうと思う医師は、同じ医師として恥ずかしくないのでしょうか？仲間を本当に守ろうと思ったら、困難な状況に立ち向かわせるように支援をしないと当該医師も心は回復しないと思うのですが・・・」と伺ったところ、「そうなんだよ！岡本さんもそう思うでしょう。事は簡単で、同業者として悪い事は正すという単純なことなんだよ。それが身内からできなかつたらはずかしいよねえ。」とまるで少年のような澄んだ目でおっしゃっていらしたのが印象的です。ただ、ただ残念でしかたがありません。

ご冥福をお祈りいたします。でも私同様に清水先生が亡くなられたことを信じられない方は多いと思います。きっと今も私たちの横についてきてくださって、お尻をたたいてくださっていると思います。

医療コミュニケーション研究者 岡本左和子

🌸2004年4月に西東京市の女性5人でNPO法人生活企画ジェフリーを立ち上げました。NPO法人には理事が10人必要です。そこで4人の夫に理事として加わってもらいました。その一人が清水さんです。皆が集うと幅広い意見交換が始まり、中でも清水さん夫妻は楽しい話題を提供してくれました。

昨年5月、清水さんは「最後になるかもしれない」と言って総会と懇親会に参加し、寄付をしてくれました。明るく冗談を言いながらペペロンチーノを平らげる清水さんを見て、きっと大丈夫と安心したものです。

ゆきさんの公開講座で一緒にした際には、腰に抗がん剤をぶら下げ「つわりなんだ」と言うので、「つわりが体験できてよかったですね」と返すと「医者や女性の気持ちがわからないといけないからね」と笑っていました。また、口内炎で水も飲めないときでも「ペペロンチーノが食べたい」と話すいたずらっ子のような目が忘れられません。

清水さん、もっともっとお話を伺い、一緒に活動したかったです。これからは私たちに天国から声援を送ってくださいね。

角田(つのだ)とよ子 浴風会介護支え合い電話相談室長

🌸テニスと一緒にしたかった。テニスは情け容赦のないテニスときいていました。同世代の、とくに男は年をとるにしたがってどんどん保守的になっていくのに、清水先生は違った。

カッコいいと思える数少ない男性でした。もっともっと生きていてほしかった。

ご冥福をお祈りします。

こすもす cosmos 編集者 河田 由紀子

🌸「医師に必要なのは、倫理観と思いやり、責任感」

清水陽一さんが優れた臨床医であり医療の良心を体現する人であることは、ここまでに多くの方が万の逸話を披露してくださるでしょう。ですから私は、清水さんが患者として求めたケアについて触れたいと思います。

話は少し脇から入ります。私はこの6月、岩手県南部で泊まった民宿の亭主に、亡きお父様の話を聞きました。92歳で白内障の手術をしたといえます。当初、中核都市の病院医師には「心臓も悪いし胆石もあるし、この歳なんだから（手術は）しなくていいよ」と断られたそうです。けれど地元の医師は、盛岡市の大病院を紹介してくれた。「生きているうちは、世の中をちゃんと思いたいんだ」と言ったお父様の生きる気持ちに感動したからだといえます。お父様は、手術一ヶ月前の肺炎も「白内障手術を受けたい一念で」克服。退院すると嬉々として大好きな新聞や本を読んで暮らし、約1年後に旅立たれたそうです。

清水さんに昨年7月、癌患者としての気持ちを聞きました。まず術後。「担当医はベッドサイドにきて顔をのぞき込んで、手術はうまく行きました、と言うだけ。こちらは手術云々より、腸閉塞が苦しかったのに」。再発転移も自分で触診して見つけたといえます。「何度も検査したが、医師はデータをみるだけで触診してくれなかった」。

素人目には、清水さんは自分で症状を説明できるし、自分で触診して見つけたならいいのでは、と映ります。でも、清水さんが医療者に求めたのは、患者一人ひとりの苦悩や痛み、不安に思いをいたし、あらゆるコミュニケーションツールを駆使して患者の生に寄り添う姿勢でした。

医師に必要なのは頭脳明晰なことではなく、倫理観と思いやり、責任感の三つだといつも講演で話しておられました。岩手県の翁をもし診察していたら、きっと同じように手術を応援されただろうな、と思います。そして自らが思いやりの医療を実践していたからこそ、患者として出た言葉だったのだと思返しています。

ご冥福をお祈りいたします。

朝日新聞 ジャーナリスト学校 岡本峰子

🌸『後悔』そして、そこからの学び

清水先生との出会いは、とても思い出深いものでした。それは、ゆきさんがコーディネーターを務められた『患者の声を医療に生かす』の第1回目のパネルディスカッションの席でした。

パネルには、清水医師、患者のご家族、がんサバイバーの看護師の方、患者の立場から私の4名が並びました。最初、その4名の距離感は大きなものを感じられ、このパネルがどこへ導かれていくのか、不安に感じたことを思い出します。パネルディスカッションでは、それぞれが、自らの経験と思いを語りはじめました。清水先生は、医療事故と向き合い、前にすすむことの難しさと大切さを丁寧に話してくださいました。先生のお話は、医療者が抱える『痛み』を学ぶ機会となりました。医師の苦悩を知る事は、一般市民の私にとっては衝撃でした。また、その勇気と行動力に圧倒されました。当初感じていた距離感は、あっという間になくなり、スピーカーも受講者も、それぞれの立場から同じ方向を向いて、医療をみつめることができたと思えました。立場をこえて、つながることを体験した貴重な空間でした。

パネルディスカッションが終わったあと、清水先生は私にかけよってくれて、「是非、患者経験者をまじえてこれからも一緒に勉強会をしていきましょう。うちの病院では定期的にはなしあう場をつくっているんですよ！」と声をかけてくれました。（ああ、本当に先生方と学びの場を続けたい）と思いながら、わたしはついに行動にうつすことができないまま、清水先生の訃報を聞く事になりました。

医療者と市民が、同じ目的にむかって共感できるという貴重な体験をさせてくれた清水先生。そして、その共感を継続するように促してくれた先生。

わたしが、自分の活動や、経験に対して自信をもてずに躊躇しているあいだ、とうとう再会の機会を失ってしまいました。目の前の時間は限られているということ。行動はおこさなければ続かないということ。そんな大切なことを、『後悔』という形で学んでいます。

清水先生の姿勢と勇気を大切な思い出として、自分も持っているこだわりを医療の中で考え続けたいと思います。ご冥福をこころからお祈りします。市民としてできることを、少しずつがんばりますので、見守っていただければと願います。

内田スミス あゆみ 通院・入院・お見舞いガイド 主宰

講義レポートから

再発、副作用のさなか、実践と理想を語ってくださった清水さんのお話に心を揺り動かされ、まるでファンレターのようなレポートが多数寄せられました。2010年秋、国際医療福祉大学大学院の「現場に学ぶ医療福祉倫理」の授業での出来事です。

そのいくつかを抜粋して、清水ドクターを偲びたいとおもいます。(ゆき)

★ はにかんだ笑顔、サムライのような潔い態度/その存在が人を育てる *★*

新東京病院の循環器科部長だった清水陽一さんが、葛飾、堀切の病院長に赴任したのは1998年のことだ。すでに清水さんは心臓カテーテル治療の専門医として高い評価を受けていた。その清水さんが、低湿地帯で町工場が集まる、人口1万4000人の堀切に舞い降りたのである。

120床あまりの元老人病院を、循環器医療に特化した急性期病院に変えた。12年後の今、清水院長率いる新葛飾病院は、全国的にレベルを認められる病院に生まれ変わった。清水さんは、「うそをつかない医療」を改革のシンボルに掲げたのだと思う。

患者にうそをつかない。患者をごまかさないためには、患者と接する現場スタッフ一人ひとりの“人間としての力”が問われる。マニュアルでは、いいサービスは生まれない。では人間力はどうやったら育まれるのか。それは「経験の蓄積」と「やりがい」から生まれるのではないだろうか。社会の一隅を照らしているというやりがいこそ、人間の働く意欲をかきたて、臨機応変な工夫を生みだす。

清水さんは「うその上塗りはずは必ずはがれる」と語る。隠ぺい体質が固定すると、スタッフのやる気が損なわれ、その心が崩れていく。肝心なのはスタッフが働くことに誇りがもてることである。だから「医療過誤の当事者を孤立させないことがだいじ」とも語り、細かい気づかいが感じ取れた。

苦労を重ねながらも病院経営を軌道に乗せた08年、清水さんに大腸がんが発覚した。講義をなさった日も、抗がん剤治療を終えてこられた。「口の中が口内炎だらけなんだ。ペペロンチーノ好きだけど辛ら〜い」とおどけた。

はにかんだ笑顔、サムライのような潔い態度。負けん気。

影響を受けた幸せを感じている。人に影響を与えるのは人だ。

(藤原瑠美さん)

★ 「嘘をつきました」とのハワポのスライドに衝撃 *★*

仕事で教室に駆けつけられず、インターネットで視聴しました。心に響きました。

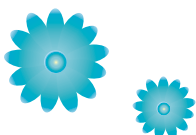
最初、腰にぶら下げているのが何かわからないまま、聴いていました。そうだったんですね!! 清水先生は院長であり、がん患者であり、医療事故でなくなった方の遺族であり、「私の原点は、医学生時代の医療事故告発、医療革命との出会い、そして医療事故で父を死亡させたことから始まる」とは、なんと壮絶な人生を歩いてこられたのかと胸がいっぱいになりました。

でも、流れるビデオで観る清水先生は、とてもハンサムで、黄色のネクタイがとても素敵で、体調が悪いとはとても見えずにエネルギーに話されていました。こんな先生が院長なんて新葛飾病院は恵まれている病院だなとوراやましく思えました。

「嘘をつきました」とのハワポのスライドにびっくりしてしまいましたが、その経験が「うそをつかない医療」に結びついているのだなど、周りの医師とは比較にならないと改めて感じました。

看取るとき、看取られるときに、「ああ面白かった。」と言ってもらえるように、言えるように私も頑張っていこうと思います。あっという間の時間でした。

(音成佐代子さん)



*** ★ * 理想が努力で現実になることを学びました。* ★ ***

入学して良かったとつくづく思いました。講義中なのに涙が止まりませんでした。本当の医療の在り方、実践を学ばせていただきました。医療者として本当になすべきことを「ねばならない」ではなく「したい医療」と、自分の辛い治療中に生き生きと語られました。大きなエネルギーをいただきました。

語るの簡単ですが、経済性や労力を考えると実践するのは非常に困難です。それを院長自ら本当に患者の立場に立って実践されている講義を聴かせていただき、理想が努力で現実になることを学びました。

うその医療が患者と医療者の隔りを招いていること、主体は患者であるのに、そして、うそのない医療が当然であるのに、現実の厳しさを逆に痛感しました。

そして、今、看護教員として私のしたいことが見えてきました。 (古川久美子さん)

*** ★ * たくさんの人に分け与えられる魂のエネルギー * ★ ***

清水陽一先生の、まっすぐに事実をきちんと伝える姿勢に感動しました。以前勤務していた、松下電工の営業担当の社員の「人は、真実をきちんと伝え、頭を下げている人を殴ることはできない」という言葉を思い出しました。患者さんは医療の消費者であるのだと考えながら聞いていました。

「自分の仕事・役割に自信を持つ事」「過去は変えられない。大切なのはこれからの事」「正直に素直に心から」「心をこめて」「人は温かい」「人と人と同じ人間同士、言葉を通して、言葉にも心をのせて」という清水先生の言葉を心に刻みました。たくさんの人に分け与えられる魂のエネルギーの塊を感じました。

この授業の時には夜勤で、翌日にネットで聴講しましたが、ネットを通じても感じたのですから、生でお逢いしてお話を聞けましたらもっと沢山のエネルギーや勇気をいただけた事でしょう。

実際の事だからこそ、現場で、早速スタッフに伝えています。

化学療法中の身でありながら、そのことすら話題にしてしまい、さらりと話されていく闘病姿勢に、先生のこの世の中における大きな役割を感じました。隠さず、逃げず、ごまかさない姿勢を持ち続けたいと考えています。(小野寺郁子さん)

*** ★ * 介護の職場で生かしたい * ★ ***

「人は他人の死を目の前にして死を学び、自分の死を前にして生を意識する。」清水先生のわざとも思える頼もしくも愉快地に自分の最後の役割を、語られる講義に自分がこれまで行き詰まっていた、ストレスや職場での悩みが恥ずかしくなり、もし自分だったら清水先生のように最後、前を向けるだろうかと自問自答を繰り返しながら聞かせていただきました。

人はミスを隠そうとする傾向があり、に医療福祉分野ではや失敗を恥じらう現場風土になりがちです。清水先生のように医療が行うべき「意味合い」がはっきりとしたものである以上、結果がどうなったとしても、過去を振り返り原因を探求し、間違いをもはっきりと示し次に繋げていく姿勢が、医療福祉職として本来の役割を明確に示させる強みと感じました。

私は介護施設で管理者を行っており、クレームでの対応では、どこか似たものがあると感じて聞いていました。クレームとは現在起きてしまった状況への謝罪が求められるだけではなく、最終的に家族の想いとは過去にさかのぼり時間という状況の中での、患者さんに対する意識や気配りの無さ(孤立)気配りの足りなさに対する。取り返しのつかない状況への葛藤であると考えております。つまり、清水先生のように、間違いはあったとしても、誠心誠意事の原因やトップ自らが現場、家族に立ち会う姿こそが、家族に対しては安心させる「存在感」のような姿勢が出来るのだと思います。それとは逆に、責任逃れのような転嫁する話ではまるで印象も異なると思うのです。(阿部英明さん)

*** ★ * 感謝されるためではなく、喜んでもらうため * ★ ***

様々なことを感じる事ができたが、なにより、「医療者として、人に役立つことが素直にうれしく、この幸せを分かち合いたい。医療、福祉、介護従事者であることの幸せを感じてもらいたい。」との清水先生の言葉に、なぜ看護職を目指し、現在退職してお金をかけて助産学を学ぼうとしたのか改めて考えることができた。

感謝されるためではなく、喜んでもらうため、少しでも不安や辛さを軽減できるように関わりを持ちたい。

講義を通して、このような職業を選択できたことを幸せだと感じた。(大泉 千代子さん)



ゆき@隠さない・逃げない 嘘をつかない医療を 貫いた院長の死 (*A*)

大熊 由紀子

ある日東京に生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『物語・介護保険』（岩波書店）『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』『寝たきり老人のいる国いない国』『福祉が変わる医療が変わる』（ぶどう社）『患者の声を医療に生かす』（医学書院）など。国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム）。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係 & 小間使い。http://www.yuki-enishi.com/ の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバーが読めます。

第96回

①アドバイスを求めて訪ねた内野直樹院長（うおろ2008年11月号にご登場）を「勝つサンド」で迎えた清水陽一院長（5月24日、東京・葛飾の新葛飾病院の病室で）

真のボランティアは、自分がボランティアだと気づかない——この連載をおさめた『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』（ぶどう社）のためにつくった「5つの法則」の一つです。

やむにやまれぬ思いから困難な道を切り開く「真のボランティア」は、自分がボランティア精神の塊だとは思っていないことを「発見」したのです。そのお一人、清水陽一さんが6月19日夜、亡くなりました。

「代替がない、かけがえがないという意味で日本の医療界は、本当に貴重な人材を失くしました。悲しいです」（熊本大学准教授・糸和彦さん）

「医療の良心のともしびの一つが消えたような思い……。衝撃です」（元日経新聞編集委員・尾崎雄さん）

「当たり前前を当たり前前に行かない医療業界。それを、当たり前前に行き抜くという信念。あの笑顔とは裏腹に、厳しく、辛いことも多くあったことと推察します。心から尊敬していました」（二分脊椎症当事者の会・鈴木信行さん）

写真①は、亡くなる1カ月前の「あの笑顔」です。

◆危険を省みず医療事故の証人に◆

ボランティアには、「困っている人のために余暇を投げ出す優しい人」というイメージ

があります。それとは肌合いの違う、自らを危険にさらす2つのタイプのボランティアがあるように思います。

一つは、ノーマライゼーションの父、バンクミケルセンが学生時代に身を投じたナチへのレジスタンス運動のような、文字通り、生命を失うかもしれないものです。

もう一つは、「社会的な生命」を危険に晒すもの。自身の属している社会の嘆かましい文化や風土を変えようとするボランティアはこの危険に見舞われます。清水さんは、このタイプの人でした。

それは、医学生時代に始まりました。産科で起きた医療事故を知って、「経験の浅い研修医をひとり当直させていたことが事故を招いた」「連絡体制が悪いために救命ができなかった」「都会の大病院として許しがたい」と遺族とともに自らが学んでいる大学の付属病院を告発したのです。

封建制が残り、卒業後の職場にも教授の意向が強く反映する医学界では、前代未聞の行動でした。弁護士を頼むことも知らず負けてしまいました。これが後の人生の原点になりました。

75年に東京医大を卒業した清水さんは、循環器内科の分野で頭角を著し、名医とたたわれるようになりました。にもかかわらず、というか、それゆえにか、再び医療界の掟を破ります。理不尽な医療事故に会った遺族は、その原因が知りたくて訴訟



④「嘘をつかない医療」定着のため、この病院で医療ミスを経験した被害者を招いて勉強会2002年6月1日



⑤「現場に学ぶ医療福祉倫理」の第1回ゲスト講師、変じて、院生と並んで毎回勉強、再発のため、口から食事できないけれど、夜9時すぎからの課外授業にも参加



②取り違えミスを防ぐために、名前確認の仕組みを現場が工夫



を起こすことがあります。医師から依頼があれば、高名な教授、専門医が病院に有利な意見書を書いてくれます。けれど遺族の側に立ち、危険を犯して真実を述べしてくれる医師はめったにいません。清水さんは、しばしば患者側証人になりました。勉強家の清水さんが味方についての裁判は、患者側の連戦連勝でした。

◆事故遺族を職員に、講師に◆

いくつかの病院の循環器科部長をへて、ワケアリの新葛飾病院の院長に迎えられたのは98年のことでした。「男はつらいよ」で知られる東京の下町のこの病院は、「シニカツ病院」というあだ名の評判の悪い老人病院でした。「あそこに入ったら、生きて出られない」という意味です。

手術室さえないこの病院を清水さんは、日本有数の心臓病治療に強い病院に育て上げました。同時に、「嘘をつかない医療」を改革のシンボルに掲げました。

「隠さない・逃げない・ごまかさなない」「うその上塗りには必ず剥かれる」と、ミスがおきたときには包み隠さず話しました。同時に、「医療ミスを起こした当事者を孤立させない」。こうした院長の姿勢に感動して、ミスを防ぐための写真②③のような様々な工夫が現場から提案されてゆきました。

他の病院の医療事故でわが子を失った豊田郁子さんを、セイフティマネジャーに招く、

という前代未聞の人事もやっつてのけました。「僕も医師。患者さんの立場を忘れるかもしれない。だから、豊田さんに見張ってもらっている」。こんな清水さんを信頼した遺族が、「医療事故から学ぶ院内シンポジウム」に講師として登壇してくれるようになりしました(写真④)。

「架け橋」患者・家族との信頼関係をつなぐ対話研究会」「医療の良心を守る市民の会」の副代表に就任。副代表なら引き受けるのが、清水さんらしいところです。

◆死を前にしても、学び続けて◆

病院経営を軌道に乗せた08年、清水さんを癌が襲いました。再発を繰り返す中で、清水さんは、痛みを和らげる医療、住みながらの自宅で最期を迎えようとしている人を支える医療に取り組みました。

そんな清水さんを、私の仕事場、国際医療福祉大学大学院の公開講義「現場に学ぶ医療福祉倫理」の講師にお招きました。驚いたのは、その後、自身も聴講生になってしまったことでした。抗ガン剤を体に注入する小型ポンプを身につけながらの登校です。夜9時に授業が終わったあとの恒例、「課外授業」にも加わりました。

いまも忘れられないのは、涙だらけで聴いていた院生、聴講生をまるで励ますように、授業の締めくくりに映しだされた上のスライドです。

